

中古漢語における有声音の帯気性(2)

—森博達氏の説をめぐって—

吉池孝一 中村雅之

再び、Maspéro 氏の説について

吉池：中古音の有声音(全濁音)が有気であったか無気であったかについて、今回は Karlgren (1915-1926)¹と Maspéro(1920)²の説を確認しました。Karlgren 氏は有気音とし、Maspéro 氏は7世紀までは無気であったが、8世紀以降には有気になったという説でした。

中村：Karlgren 氏は現代諸方言での表れから有気音とするのが妥当とみなし、Maspéro 氏は漢訳仏典における梵語の漢字音訳に基づいて7世紀までは無気で、8世紀以降に有気になったと論じたのでした。我々は前回の対談で、梵漢対音の状況は漢語全濁音の気音が梵語より弱かったことを示しはするが、無気音であったことを証明するものではないと考え、Maspéro 氏の説は必ずしも決定的なものではないとしました。

吉池：そもそも一般論としてですが、b, d, g, dz のような有声音がある時期を境に一斉に気音を伴って b^h, d^h, g^h, dz^h になるということが起こるものなのでしょうか。発音の労力という点からみても、b, d, g, dz より b^h, d^h, g^h, dz^h の方が労力を要するでしょうから、わざわざ負担の大きな方向に変化が起こるとするのは自然ではないように感じるのですが。

中村：確かにその通りですね。逆に気音が一定の条件で消える方向の変化は多くの言語で見られるところです。

吉池：印欧語ではグラスマンの法則が有名ですね。有気音の音節が続くと異化作用で前の方が無気音になる。これはモンゴル語のチャハル方言にも見られます³。

中村：Karlgren 氏の説でも、平声以外の声調すなわち仄声では b^h, d^h, g^h, dz^h > b, d, g, dz の変化が生じたとしています。これは異化ではありませんが、変化の方向としてはさほど無理が

¹ Karlgren, B. (1915-1926) *Etudes sur la phonologie chinoise*. Upsala. 本対談においては、趙元任、羅常培、李方桂訳(1940)『中國音韻學研究』(再版1948)の漢文と頁数を提示する。

² Maspéro, H. (1920) "Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang," *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 20: 1-124. 本対談の議論においては、聶鴻音訳(2005)『唐代長安方言考』(世界漢學論叢)北京：中華書局の漢文と頁数を提示する。

³ 吉池孝一・中村雅之・長田礼子編著(2020)『女真語と女真文字』(古代文字資料館)所収の「女真文字談義(6) —アルタイ諸語の s の音質、グラスマンの法則、異化とアクセントの位置—」(吉池) 56-59 頁参照。

ないということになります。

吉池：Maspéro 氏の説ではもう一つ気になる点があります。8世紀以降の長安音に有声有気音を想定していますが、その時期には有声音は無声化していたというのが一般的な見解ではないでしょうか。日本漢音はその状況を如実に反映します。強（呉音ゴウ、漢音キョウ）や弟（呉音ダイ、漢音テイ）など。

中村：その点は大きな問題ですね。しかし事実として梵語の有声有気音に漢語の全濁音が当てられている訳ですから、長安人が実際の音声とは別に“話し手の脳裏にある言葉音を認識する習慣の型（音韻観念）”としての濁音をどうとらえていたかという問題になります。この問題は全濁音に気音があったかという今回のテーマともかかわる部分があるので、後でまた触れたいと思います。

吉池：わかりました。まずは Maspéro 氏以降の説を確認することにしましょう。

李榮(1952)の説

中村：森博達(1991)⁴には「全濁音の気音」（102 頁以下）という一節があります。そこでは Maspéro 氏以降の説として、李榮『切韻音系』（中国科学院、1952）を取り上げて次のように記しています。（下線は引用者）

李榮『切韻音系』には「圓明字輪譯文表」と「根本字譯文表」の二表が附載されており、西晋の竺法護（二六九年）から九世紀初頭の空海まで、合計一九名・26 件におよぶ音訳表がまとめられている。李榮氏はこの資料によって、隋以前（六世紀末の闍那崛多の訳文まで）の有声破裂音が無気音であったことを証明している。

この後に、森氏は李榮氏の検討が十分でない 7 世紀以降の状況について分析をしているのですが、まずは下線部の検討から始めなければなりません。本当に“証明”しているのかということですが。

吉池：李榮(1952)⁵ は、梵漢字母表（115 頁）により隋代以前の漢語全濁音（有声音）は無気であったとします。下の表のように、梵語の有声無気音（g など）の表記には通常の濁音漢字を用い、有声有気音（gh など）には「何、呵」「重音」や口偏を加えたり、鼻音韻尾字を用いたりしています。このことより漢語全濁音は無気であったとします。7 世紀については言及がありません。8 世紀については、梵語及び漢語の方言音に言及し、漢語全濁音が無気のみである可能性と有気となる可能性を示すのですが一定の結論が導かれるわけではありません。

⁴ 森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』（大修館）。

⁵ 李榮(1952)『切韻音系』（語言學專刊 第四種）北京：中國科學院。

	ga	gha	ja	jha	ḍa	Ḍha	da	dha	ba	bha
西晉竺法護(286年)	迦	迦何	闍		咤	{口毛}	陀	陀 呵	波	披 何
東晉法顯(417年)	伽	重音 伽	闍	重音 闍	茶	重音 茶	陀	重音 陀	婆	重音 婆
劉宋慧嚴等(424-432?年)										
北涼曇無讖(414-421年)	伽	{口恒}	闍	膳	茶	袒	陀	彈	婆	{彳梵}
梁僧伽婆羅(518年)	伽	恒	闍	禪	陀	檀	輕 陀	輕 檀	婆	梵
隋闍那崛多(591年)	伽	{口恒}	闍	社	茶	{口茶}	陀	咄	婆	嚩

*{ }内は偏と傍の1字。本対談の便宜的な表記。

*李榮氏は梁僧伽婆羅の「輕陀」「輕檀」の「輕」は反舌の有無を示すもので、氣音の有無とは無関係とする。

*竺法護の音訳字のうち「ba」「bha」について、李榮氏は「波對 ba, 披何對 bha, 波披都是清音, 應當是錯字。」と記す。

總結起來, 隋以前對譯梵文字母, 送氣濁音用二合, 加說明, 鼻音韻尾字, 加偏旁各種很勉強的辦法去對, 可見漢語濁塞音本來不是送氣的; 不送氣字就用普通的濁音開尾字去對, 不加說明, 不特別加偏旁, 可見漢語濁塞音本來是不送氣的。 (114 頁)

中村: Maspéro(1920; 2005)も梵漢対音で梵語の有声有氣音の方に「重」と注記することより漢語全濁音は無氣であったと結論しました。それに対して前回の議論では、梵語の有声有氣音と漢語の全濁音を比べて、梵語の有声有氣音の有氣がかなり目立って(大きく)聞えたため「重」と注記したとも考えられるとしました。李榮(1952)の梵漢字母表も同様です。

吉池: このような梵漢対音資料を以って、漢語全濁音は無氣であったと論証することはできない。あえて音声記号で表現すれば梵語 [d^h] と漢語 [d^h] というような違いで、漢語の全濁音にも氣音はあったとみることは可能だということでした。ところで、李榮(1952)の 114 頁には Karlgren 氏の全濁音有氣音説が成り立たないことについて興味深い記述があります。

Karlgren 氏は、全濁音の氣音は強い濁氣流で梵語音 gh [gh] と同じとするからには、全濁音の「迦」を gha に当てずに ga に当て、gha には氣音を示す「何」を付した「迦何」を当てるのは理屈に合わないというものです。

要是群母本來是送氣濁音, 像高本漢所說的, ‘在 g 除阻後有一種強的濁氣流, 就是完全跟梵文的音素 gh[gh]相似,’ (音韻學 254, 原文 358。)何以不用迦來對 gha, 反而用來對 ga, 另外造一個雙料的 g'ya 【迦何——対談者補】去對 gha? 這實在是高氏送氣説最大的弱點。

中村: Karlgren 氏が漢語全濁音の氣音と梵語の有声有氣の氣音を同じとするならば、確かに李氏の言うとおりの理屈にあいません。また我々は、梵語の有声有氣音と漢語の全濁音を比べ

て、梵語の有声有気音の有気がかなり目立って（大きく）聞えたと思定しますので、我々の漢語全濁音とも異なることになりますね。

森博達（1991）の説－梵漢対音－

中村：森氏の説は、梵漢対音に関する部分と日本書紀α群に関する部分とからなります。まず、梵漢対音に関する部分ですが、結論は8～9世紀においても全濁音は無気音に近かったということのようです。

吉池：森氏は日本書紀α群の仮名を考えるためには唐初から8世紀初頭の時期が特に重要として、この時期の6名の訳経の状況を李榮(1952)の「増録一圓明字輪譯文表」「増録二根本字譯文表」に拠り表にまとめています（104頁の表10）。

表 10

梵字 対訳者	有声無気音					有声有気音				
	ga	Ja	ḍa	ḍa	ba	gha	jha	ḍha	dha	bha
玄 奘 (660～663年)	伽	闍	茶	柁	婆	鍵		擇	達	薄
玄 應 (649年)	伽	闍	茶	陀	婆	{口恒} 其柯反	膳 時柯反	咤 佇賈反	馱 徒柯反	婆
地婆訶羅 (683年)	伽 上聲	社	茶 上聲	陀 上聲	婆 上聲	伽	闍	茶	陀	婆
義 淨 (690～692年)	伽	社	茶	拏	婆	嘘	縊	{ネ定}	但	{口梵}
實叉難陀 (695～699年)	伽 上聲 輕呼	社	茶 徒解切	柁 輕呼	婆 蒲我切	伽 上聲呼		陀	柁	婆 蒲餓切
善無畏 (724年)	哦	若	拏	娜	摩	伽	社	茶	馱	婆

*{ }内は偏と旁の1字。本対談の便宜的な表記。

中村：李榮(1952)の増録一、二の表の情報によると、漢人が玄奘、玄應、義淨、印度人・于闐人（コータン人）が地婆訶羅（中天竺）、實叉難陀（于闐）、善無畏（中天竺）ということですね。

吉池：この対音資料には漢語話者と梵語話者の相違が表れていますので、細かい点に言及する前に確認をしておきたいと思います。対音資料を見る場合、音訳の方向（音訳の仕方）を確認する必要があります。結果として結論に影響を及ぼさないとしても先ずその点を考慮

し作業を進めるべきでしょう。その意味で、この表のように、漢人と外国人を同列に配するのはどうか、と思います。漢語話者は自らの音の習慣（音韻観念）に照らして梵語の音声を聞き、梵語話者（于闐人は措くとして）は自らの音の習慣（音韻観念）に照らして漢語の音声を聞き判断をし、音訳をすることになります。両者は音訳の方向（音訳の仕方）を異にします。漢語話者は有声有気音に注記を施し、梵語話者は有声無気音に注記を施す傾向があるのは、音訳方向（音訳の仕方）の相違の反映でしょう。

中村：漢人は有声有気音に着目し、玄奘はこちらに n 韻尾や入声韻尾を使い、玄應は反切を付し、義浄は口偏を加えたり見慣れない文字を使用したりしていますね。

吉池：印度人や于闐人は有声無気音に着目します。地婆訶羅は「上聲」の注記をし⁶、實叉難陀は「輕呼」の注記をします。善無畏は他の訳経者とは異なり漢語の鼻音声母で有声無気音を表記し漢語の全濁音で有声有気を表記しています。地婆訶羅や實叉難陀とは質が異なるので別の解釈が必要です。

中村：この状況に対して森氏は「いま表 10 によって玄奘・玄應・義浄の対訳を見るに、梵語の有声無気音にも有声有気音にも均しく全濁音字を当てているが、そのうち有声無気音には通常の音訳漢字を用い、一方、有声有気音には陽声韻尾字や入声韻尾を用いたり、偏旁を加えたり、注記を添えるなど、苦心して音訳している。これらは前代までと同じ音訳の方法であり、ここから全濁音が引き続き無気音に近かったことがわかる。」(104-105 頁) とします。無気音に「近かった」というのは慎重な表現ですね。全濁音に気音があった可能性を完全には排除していません。

吉池：これに続いて森氏は、善無畏も含め（表 10 には注記はないが善無畏作の他の字母表の有声有気には「重声」と注記されるという）8 世紀～9 世紀初頭の音訳でも、梵語の有声有気音の音訳にのみ「重声」とか「重」という注記を施したものがあることから、結局、「隋代以前から九世紀初頭まで、標準的な北方漢語の全濁音は一貫して無気音に近かった」(109 頁) と推定しています。やはり「無気音に近かった」との表現ですね。

森博達（1991）の説—日本書紀 α 群の仮名—

中村：日本書紀（720 年）は、森博達氏によれば、α 群と β 群に分けることができ、α 群の歌謡に用いられた音仮名は唐代長安の中国人の吟味を経たものであるとのこと。この「α 群原音依拠説」は現在ではほぼ受け入れられていると言ってよいかと思います。そして α 群では日本語のサ行・タ行・ハ行の清音に対して、漢語の全清音（無声無気音）が用いら

⁶ ただし、森氏の説明では、この「上声」は短音であることを示すもので、有声音以外にも多くの字に付され、「上声」の注記がない有声有気音の方が特異だという。(105 頁)

れ、次清音（無声有気音）の字が避けられていることから、当時の日本語の清音は無気音に近かったということです。さらに全濁音字も日本語の清音に用いられていますから、単純に考えれば、日本語清音＝漢語全清音＝漢語全濁音ということになり、全濁音も無気音であったということになります。

吉池：全濁音字が日本語の清音に用いられるということは、当時の長安音で全濁音が無声化していたということではありませんか。

中村：そういうことになります。

吉池：先ほどの梵漢対音では全濁音字が梵語の有声音にあてられていました。そのこととはどのように整合性をはかるのでしょうか。

中村：それがなかなか厄介なところです。森博達（1991）の「日本語清音の調音方法」（109頁）という一節では次のように記しています。

唐代北方音では、全濁音はそのコエが弱化し、しかも無気音に近かった。しかし、全清音と合流してはいなかった。おそらく、全清音が [p]・[t]・[k]・[ts] のような声門閉鎖の強い完全な無気音であったのに対し、全濁音は [b]・[d]・[g]・[dz] のように、持続部において声門がささやきの位置をとる不完全な無声無気音に近かったのだろう。

つまり、森氏の想定では、全濁音は完全に全清音と合流している訳ではなく、「不完全な無声無気音」として区別されているという考えです。そして日本語の清音については次のように述べています。

清音仮名に対して、全清音のみならず全濁音も多く用いられた。次清音字を極端に忌避しながら、全清音と全濁音を並用したのは、日本語の清音が全清音と全濁音のどちらか一方にピッタリの音色をもってはいなかったからであろう。つまり、日本語の清音は、無声無気音の中でも、唐代北方音の全清音ほど声門の閉鎖が強くなかったものと推測されるのである。

これを図式化すると、閉鎖の強さは、全清音＞日本語清音＞全濁音ということになります。閉鎖の強さにおいて日本語は中間的だったので、漢語の全清音と全濁音の双方が用いられたという説明です。

吉池：説明としてはなかなか巧妙ですね。その説明の前提となる表が 99-100 頁にあるので確認したいと思います。

表 2

声母	行	ハ行	バ行	マ行	計
全清	幫	11(98)	2(3)		16(119)
	非	3(18)			
次清	滂	1(1)			1(1)
全濁	並	11(75)	3(5)		18(94)
	奉	2(12)	2(2)		
次濁	明		6(29)	2(242)	11(300)
	微			3(29)	
計		28(204)	13(39)	5(271)	46(514)

表 3

声母	行	タ行	ダ行	ナ行	計
全清	端	11(114)	4(7)		19(136)
	知	4(15)			
全濁	定	12(107)	4(22)		17(130)
	澄	1(1)			
次濁	泥		5(17)	14(193)	22(298)
	娘			2(69)	
	日			1(19)	
計		28(237)	13(46)	17(281)	58(564)

表 4

声母	行	カ行	ガ行	計
全清	見	23(281)	1(1)	24(282)
次清	溪	7(16)		7(16)
全濁	群	5(22)	1(1)	6(23)
次濁	疑		16(72)	16(72)
計		35(319)	18(74)	53(393)

表 5

声母	行	サ行	ザ行	計
全清	精	3(16)		27(201)
	章	5(67)		
	心	12(84)		
	書	6(33)		
	生	1(1)		
全濁	從	3(13)	1(1)	5(15)
	常		1(1)	
次濁	日		7(20)	7(20)
計		30(214)	9(22)	39(236)

確かに日本語の清音ハ、タ、カ、サ行に漢語の全清音と全濁音を当てますね。大事な点は、漢語話者が日本語清音の“音声”をどのように聞き取り、それに対して自らの音をどのように当てたかということではないでしょうか。全濁音の音韻観念（{}で表記します）が、無声音と有声音の中間段階の{b}・{d}等であったとは想定しにくく、有声音の{b}・{d}等か無声音の{p}・{t}等のいずれかであったと想定します。音声としては半有声音として実現する場合もあったでしょうが、私は有聲有気音と見たいのですがいかがでしょう。この点は意見が分かれるところでしょうが。

中村：私の意見は後で述べるとして、吉池さんの想定では、漢語話者は日本語の清音を、漢語の全清音{p}{t}{k}でも全濁音{b}{d}{g}でも当てることができる音声として聞き取り、両者を当てたということですね。

吉池：漢語話者の耳に、日本語の清音は [b]・[d]・[g] のように聞こえ、濁音は [mb]・

[nd]・[ŋg]のような鼻音が先行して聞こえたのでしょうか。それで、日本語の清音ハ・タ・カ ([b]・[d]・[g]) の方には漢語の全清音 {p} {t} {k} と全濁音 {b} {d} {g} を当て、日本語の濁音バ・ダ・ガ ([mb]・[nd]・[ŋg]) の方には漢語の次濁音 ({m} {n} {ŋ} 鼻音声母) を当てたのでしょうか。日本書紀(720年撰)が撰述された8世紀初頭の漢人が脳裏に持っていた唐代北方音の濁音の音韻観念を、有声音であったと推定しても不都合はないと思います。もっとも外国人の耳には“音声”として無声音に聞こえたかもしれませんが。問題は漢語全濁音に気音が有ったかどうか、有ったとしたらどの程度の気音かということです。

中村：森博達(1991)は、20頁表2によって、α群においてカ行以外の日本語清音の表記に漢語次清音字はほとんど使用されず(1例)、β群には多用されるという次清音字の偏在を示し、「唐代北方音において、「無声化」した全濁音の気音要素がその有無・強弱の点でどのような状態にあったのか、まだ定説はない。私は気音要素がたとえ存在したとしても、少なくとも次清音ほど強くはなかったと推測する。α群で次清音が避けられたのに対し、全清音字と並んで全濁音字が清音仮名にも用いられた理由もそこにあると考えられる。」(18頁)とします。

吉池：発言の一部を切り取られるのは森氏の本意ではないかもしれませんが、「次清音ほど強くはなかった」という発言により次のように想定したいと思います。漢語全濁音は有声音有気音であったが、気音の程度は次清音ほど強くはなかったため日本語清音の表記に使用された。漢語全濁音の気音は、梵語の有声音有気音の気音と比べて弱いものであったため「軽」とか「重」などの注記を付して梵語との違いを明記して使用された。これで梵漢対音と日本書紀α群の漢語全濁音の用法を説明することができると思うのですが、中村さんのお考えはいかがでしょう。

中村：問題はいくつかに分かれると思います。

- ① 中古音(隋代音)の全濁音が有気音であったかどうか。気音の程度はどうか。
- ② 中古音の全濁音は唐代には無声化していたのか。
- ③ 唐代長安音において全濁音が有声音だった場合、気音の程度はどうか。
- ④ 唐代に全濁音の無声化が起こっていたとした場合、平声は無声無気音になったのか無声有気音になったのか。

これらについて、森氏の結論は次のようなものです。

- ① 中古音の全濁音は無気音に近かった。
- ② 全濁音は唐代には無声化していた。
- ③ ——
- ④ 無声化した全濁音は無気音に近く、たとえ気音要素があったとしても次清音ほど強くはなかった。

吉池さんは唐代にはまだ音韻観念として清音とは別に独立した全濁音{b}{d}{g}があったという考えですね。

吉池：そうです。

中村：つまり、上の4項目に対しては次のようなことでしょうか。

- ① 中古音の濁音は有気音だった。その気音は梵語よりは弱かった。
- ② 唐代にも全濁音は完全には無声化しておらず、音韻観念としては{b}{d}{g}だった。
- ③ 唐代にも全濁音は有気音であった。
- ④ ——

吉池：唐の8世紀初頭まではということです。実際の音声としては[b^h]などの他に[b̥^h]のように半有声として表れたかも知れませんが、全濁音の音韻観念{b}は保持されており、隋代以来、唐の8世紀初頭までは有声音（気音は次清音より弱い）だったと思います。

中村：なるほど。私の考えは吉池さんに近いのですが、8世紀には全濁音は完全に無声化しており、音韻観念としても無声音となっていたと考えた方がよいのではないかと思います。

- ① 中古音の濁音は有気音だった。その気音は梵語よりは弱かった。
- ② 唐代には全濁音は無声化に向かったが、7世紀までは完全には無声化しておらず、音韻観念としては{b}{d}{g}だった。8世紀以降は完全に無声化して、音韻観念も無声だったが、カテゴリーとしての全濁音は保たれていた。
- ③ ——
- ④ 8世紀以降、全濁音は無声化しており、現代北方方言と同様に平声で有気音、仄声で無気音だった。

問題は②の部分ですが、7世紀以前に関しては、梵語の有声音にことごとく漢語の全濁音をあてているという梵漢対音の状況から見て、漢語話者に{b}{d}{g}という音韻観念があり、インドや西域の訳経者も漢語の全濁音を有声音と見なしていたと考えて差し支えないかと思えます。この点は吉池さんと私の考えは同じです。8世紀以降に関しては、日本漢音が全濁音を清音で発音すること、および日本書紀（720年）α群において全濁音字を日本語の清音に用いている事実から、無声化していたと見るのが自然だろうと思うのですが、いかがでしょう。

吉池：重ねて述べることになりましたが、私は、8世紀をとおして全濁音は有聲であったと主張するわけではありません。日本書紀（720年）α群の漢人の全濁音の音韻観念が{b}{d}{g}であったとしても不都合はないということです。{b}{d}{g}であったとするのは、全濁音と次清音の気音の強弱に差があったと想定し得るからです。8世紀初頭以降、全濁音の無声化

が進むと、気音の方は逆に強まり次清音と変わらなくなった。それで、北方の漢語では平声において全濁音は{p^h} {t^h} {k^h}となったということです。

ところで、8世紀以降「カテゴリーとしての全濁音は保たれていた」というのはどういうことでしょうか。

中村：北方では8世紀には全濁音は完全に無声化していたけれども、声調において清音字と調値に違いがあったので、互いの区別が可能だったのではないかと思います。また、南京などでは全濁音が有声音として発音されていたでしょうから、そのような知識もあって、梵語の有声有気音に伝統的な全濁音字を用いたということではないでしょうか。

吉池：8世紀に全濁音が無声化していたとすると日本書紀α群を記述した漢人の言語でも無声化していたということですね。そうすると、④で平声全濁音が無声有気音になっていたとありますが、これだと次清音と同音になります。しかし日本書紀α群では清音の表記に次清音は避けられています。同音の全濁音平声はどうして避けられなかったのでしょうか。

中村：おそらく日本語の低アクセントを表現するのに全濁音字の調値がピッタリだったのでしょう。森氏はアクセントの問題を副次的な要因としています（109頁）、私はかなり本質的な問題だったと思います。

吉池：具体的にはどういうことでしょうか。

中村：日本書紀の平安時代の写本には、歌謡の音仮名のそれぞれの字に日本語の高低アクセントを示す点が付いています。声点（しょうてん）と言いますが、字の左下とか左上など、声点の付く位置によってアクセントを区別するものです。α群においては音仮名の原音声調と平安写本の声点が偶然とは思えない確率で一致することが高山倫明(1981)⁷によって明らかになりました。それによれば日本語の低調には平声字が多く用いられ、高調には上声字と去声字が多く用いられるということです。いま問題になっている平声全濁音字ですが、金田一春彦氏の研究⁸などによって、原音の調値は低平調に近かったことが分かっています。日本語の低アクセントを示すのに最適ということになります。そのため、日本語の清音を表すのに、全清字（無声無気）を用いることを基本としながらも、低い音節の場合には平声全濁音字（無声有気）も好んで用いられたと考えられます。声母や韻母の一致よりもアクセントの一致を優先させる例がα群に見られることは森博達(2003)⁹でも論じられています。

⁷ 高山倫明(1981)「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」『語文研究』51。

⁸ 金田一春彦「日本四声古義」(1951)、「日本語のアクセントから中国唐時代の四声値を推定する」(1980)など。ともに、金田一春彦(2005)『金田一春彦著作集』第9巻、玉川大学出版部、所収。

⁹ 森博達(2003)「日本書紀成立論小結—併せて万葉仮名のアクセント優先例を論ず—」『国

吉池：アクセントの一致を優先させたものとして、具体的にはどのようなものがありますか。

中村：森博達(2003)では「娑(サ)」と「美(ミ甲)」の例が挙げられています。いま「娑」についてのみ紹介すると、α群では「サ」に「娑(9例)」「佐(11例)」「左(4例)」「作(1例)」の4字種が用いられますが、当時の「サ」の音[tʃa]を表すのに「佐」「左」「作」は適していますが、「娑[sɑ]」は適していません。しかしアクセントを見ると平声字「娑」は9例中7例が低アクセントの位置に用いられています。つまり、頭子音においてもアクセントにおいても最適はずの[tʃa]の平声字がなかったために、次善の策として[sɑ]の平声字「娑」を用いたということです。頭子音よりもアクセントを優先させた例ということになります。

吉池：中村さんの考えでは、無声有気音であった平声全濁音字が日本語の清音に用いられているのもアクセントを優先させた例ということですか。

中村：はい。日本書紀α群では、日本語の清音には漢語の全清音が最適ですが、調値から見ると日本語の低アクセントには合わなかった。そこで調値において全清音よりも日本語低アクセントを表現するのにふさわしい平声全濁音を選ぶこともあった。つまり、語頭子音の気音の有無の不一致を押しでもアクセントを優先させる例があったのだと考えられます。

吉池：実際には、平声全濁音字の使用状況はどのようになっていますか。

中村：森博達(1991)によってα群の平声全濁音字を拾い上げ、鈴木豊(2018)¹⁰によって声点との一致状況を確認したところ、以下のような結果が出ました(使用数の多い順)。なお、低アクセントを表す点をL点、高アクセントを表す点をH点、下降調を表す点をF点とします。

陀(タ)：全35例のうち、30例がL点。[陀は実際には異体字(「こざとへん」「𠂔」「也」)]

騰(ト乙)：全27例のうち、22例がL点。

裒(ホ)：全20例のうち、16例がL点。

娑(ハ)：全13例のうち、12例がL点。

*曾(ソ乙)：全11例のうち、L点なし、H点6例、F点5例。

*符(フ)：全8例のうち、L点4例。

陪(ヘ乙)：全6例L点。

毗(ヒ甲)：全4例L点。

語学』54-3。

¹⁰ 鈴木豊(2018)『『日本書紀』α群の万葉仮名—原音声調と日本語アクセントとの対応—』『論集』13、アクセント史資料研究会。

鞞（へ甲）：全 4 例 L 点。

囟（ト甲）：全 3 例 L 点。

{籐の竹なし}（ト乙）：全 2 例 L 点。

藤（ト乙）：1 例 L 点。

題（テ）：1 例 L 点。

提（テ）：1 例 L 点。

以上です。結果は、「曾」「符」を除くと、平声全濁音字は 8 割以上の一致率で低アクセントの音節に用いられていることになります。例外の「曾」は伝統的に「ソ」の音仮名として用いられる常用字で β 群にも多用されます。「符」については、「フ」が奈良時代に破裂音であったのか、あるいは破擦音か摩擦音か決定できないので、何とも言えません。

吉池：確かに平声全濁音字が日本語の低アクセントを表すのに用いられる傾向は見て取れますね。しかし、これらの全濁音字が有声音（気音は次清音より弱い）で、低調であったため日本語の低アクセントの表記に使用された、としても良いのではないのでしょうか。日本書紀 α 群で次清音が徹底して避けられた（カ行を除く）ことを考えると、平声全濁音字が無声有気音となっており気音の程度が次清音と同様であったとすると、アクセントの一致を求めたとしても使いにくいはずだとの見方もあって良いのではないのでしょうか。

中村：その点については意見を異にしますが、もう少し検討が必要です。日本書紀 α 群に反映した 8 世紀初頭の漢語全濁音が無声であったか有聲であったか、あるいは気音がどの程度であったかの結論を出す前に、これまでに出たさまざまな説を整理してみてはどうでしょうか。

吉池：karlgren 説、Maspéro 説、李榮説、森説、そして我々の説ですね。資料の再確認、そして音韻史の考え方を踏まえての総合的な整理が必要です。

中村：では次回に最終的な検討をおこなうことにしましょう。